

歴史は循環するものだとつくづく思う。現下の極東アジア情勢は、開国・維新から日清・日露戦争にいたるあの時代の「生き写し」ではないかと思わされるほどである。往時の極東アジア地政学を慧眼のオピニオンリーダーがどう捉えていたのか、その言説が現時点から振り返っても正鵠を射たものであれば、現在のわれわれがどう立ち居振る舞うべきかをその中に読み解く、そういう知的営為を欠かすことができない。

亡国の危機背に書いた言説

国際情勢判断に寸分の狂いでもあれば亡国につながるという緊迫の状況下で書かれた言説こそが、危機の時代にあつてなお幻想的なポストモダンニズム気分を拭うことのできない日本の世論をまっとうなものとする唯一の方法にちがいない。日本の領域を侵犯し、日本人の歴史認識に刃向かう中国、韓国を眼前にしている、明治18年、福澤諭吉がみずから創刊した

今こそ、福澤の「脱亜論」に学べ

『時事新報』に「脱亜論」を執筆したときの気分が私にもわかるような気がする。

アヘン戦争以来の列強による「西力東漸」の危機が迫る中において、李朝末期の朝鮮は政争と内乱に明け暮れ、文字通りの「末期」的症狀を呈していた。始末の悪いことに朝鮮は清国との服属関係（清韓宗属関係）にあり、内乱に際しては宗主国清に派兵を要請して事を収めるという体たらくであった。清国はといえば、もう一つの属邦ベトナムをフランスによって侵犯されながらも、大量の兵を朝鮮に派することを辞さない。

ここで、福澤は朝鮮の自主独立をめざす開化派への支援の思いを深める。多数の朝鮮留学生を慶應義塾に受け入れ、門下生を朝鮮に派遣してハングル紙『漢城周報』を刊行。密かに開化派への武器供与をも企てた。朝鮮が清国との服属関係を断ち日本の明治維新にな

正論



拓殖大学総長 渡辺 利夫

らう近代化を成し遂げねば、列強の餌食となることは火を見るより明らかだと語り、そうしなければ日本も危うい。「我々には恰も火災の火元を隣家に招きたるものにして、極度の不祥を云えば日本国の独立も疑なきに非ず」。脱亜論に先だつ明治14年に福澤はそう予言していた（『時事小言』）。

開化派敗れ清と朝鮮に憤激
しかし、開化派による守旧派打倒のクーデターが清兵の介入によって「三日天下」に終わり、首謀

清韓宗属関係の切断を狙って日本が清国に挑んだ戦争が日清戦争であり、これに勝利して日本は朝鮮と大陸への地歩を得る。しかし、日本が清国から遼東半島の割譲を受けたことに反撥したロシアが独仏を巻き込んで三国干渉の拳に出た。このロシアの南下政策に抗する日露戦争に日本は国運を賭して戦い、これにも勝利して列強の一角を占めたのである。

日本の近代史の序幕に福澤という言論人を得たことの意味はまことに大きいといわねばならない。福澤の脱亜論が日本のアジア侵略の理論的先達であるかのごとき愚論がいまなお語られているのは、驚くべきことである。自国の存亡を賭して血を吐くように絞り出された脱亜論の文章を、後世のイデオロギーで断罪しようというのは、ただの知的退嬰である。

中華帝国と韓国の事大主義

中国の海洋への膨張が著しい。防空識別圏なるものが尖閣諸島を巻き込む形で設定された。「中華民族の偉大なる復興」が近年の中国のスローガンである。史上最高

の栄華を極め、最大の版図を築いた清（大清帝国）への回帰願望の表出である。現在の中国は新帝国主義国家へと変貌した。

この事実を目の当たりにした韓国が、朝鮮に伝統的な「事大主義」（大に事える思想）への先祖返りを鮮明にしつつある。中国に寄り添いつつ日本を貶める反日シンドローム国家へと韓国は変じてしまったのであろう。アヘン戦争以来の「失われた歴史」を回収して新帝国を築かんとする中国の意図、朝鮮の事大主義への強い傾斜は、いずれも伝統への回帰であつて、そのベクトルは強靱である。

支那、朝鮮への対応は「正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ」と福澤はいうのだが、現在の文脈でいえば、抑止力を背後に擁して外交に臨むのであれば何ごとも解決しない、という意味に他ならない。日米同盟における集団的自衛権行使容認は喫緊の課題である。福澤の「生存りアリズム」の再興、これこそが今年の日本の最大のテーマでなければならぬと思うのである。
(わたなべ としお)

年頭にあたり